

### 川崎市宮前区馬絹御嶽講 「太々神楽継続奏上百回」

令和二年十月二十九日、馬絹御嶽講の太々神楽奏上がございました。馬絹講は代々毎年四月に太々神楽を奏上し続けて来られ、令和二年は継続百周年・百回目の記念の年。コロナ禍に伴う緊急事態により継続が危ぶまれましたが、延期を重ね役員六名のみのご参列にて奏上されました。心よりお祝い申し上げます。



【訂正とお詫び】  
『武州みたけ 第五十六号』「太々神楽奏上」の頁にて、「昨年（令和二年）は残念ながらコロナ禍において太々神楽を奏上することが出来ませんでした。」と誤って記載いたしました。ここに深くお詫びし、訂正させていただきます。

### 重量挙げ選手 必勝祈願

写真左から、三宅義信さん、宮本昌典選手  
糸数陽一選手、稲垣英二さん

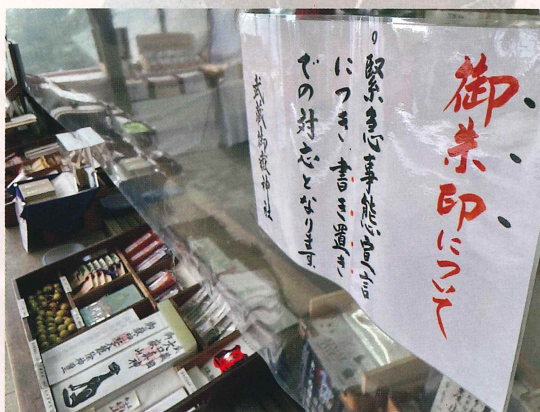


この度の東京オリンピックに出場された、六十一キロ級・糸数陽一選手、七十三キロ級・宮本昌典選手、一九六四年の東京五輪の「金メダル第一号」ほか数々の記録を樹立された三宅義信さん、コーチの稲垣英二さん。六月二十七日（日）にご来社され、オリンピック必勝祈願ならびに「夜神楽」をご覧になられました。

### 「コロナ禍」によせて

新型コロナウイルスによる、いわゆるコロナ禍がはじまり約二年。未曾有の事態に一度目の緊急事態宣言下では社務所を閉鎖。御師たちは講中の皆様へ御札を配り歩くことはもとより、お住まいの地域への移動さえも憚られるという状況に頭を悩ませ続けました。

ただ神社としては、人が集まることを忌避されるなかであってもご心遣いいただく皆様をお迎えしたい。ご祈願を望む方々をお止めしたくない。そもそも神社は緊急時にこそ開かれていなければならないのではないかと。試行錯誤を重ねながら、山内一丸となり感染症対策を講じてきました。次から次へと状況が変わるなか、最前線で尽力いただく医療関係の皆様、生活に不可欠な業務に従事される皆様、感染防止に努められる皆様、そして当山を気に掛け来山をご自粛いただきました講中・崇敬者をはじめとする皆様へ心より御礼申し上げます。御嶽大神様の御守護と皆様のお蔭様で山内に感染者を出すことなく過ごせております。



ウイルスが消え去ることはないと思います。弱毒化し、お付き合いしやすくなるまでにはまだまだ時間がかかりそうです。マスクやカーテンに声を遮られながら消毒や検温をする日々は続きますが、自分出来る範囲の対策を徹底していくことが第一です。良き方へ向かっていけると信じ、引き続き皆で努めて参りましょう。神職一同、日々祈りを捧げ、勤めて参ります。



### 「身祓社」

みそぎしや

ケーブルカー滝本駅近くの小川を渡す禊橋を越えると、御岳山登山口には大きな御嶽神社の鳥居があります。その右手に流れる「竜頭の滝（禊の滝）」のほど近くに、小さなお社があるのをご存知でしょうか。

この滝は、明治時代の社伝によれば「往古ヨリ登山者ノ禊所トシテ滝アリシヲ享保年ヨリ山下御師滝本坊再興シ」とあります。御嶽神社は古くは修験道の修行場として発展しましたが、江戸時代に神社詣が流行した際も、全国津々浦々から参拝者が訪れました。



電車や車などない時代、徒歩や馬をひきながら何日も何週間もかけて御岳を目指した参拝者たちは、いざ山の麓に到着すると神聖なお山に入る前にこの滝に打たれ、身体を清めました。心も体も清めた参拝者は最後の御坂を登り、宿坊の御師たちの手引きを受けながら、宿願であった御嶽神社へ



の御参拝を果たすわけです。その滝より向かって左に小さなお社がございます。「身祓社」は武蔵御嶽神社の境外末社として、大禍日神、大直日神、伊豆触賣神、速佐須良比賣神の四柱が祀られております。享保年間から何度か修繕はされていたようですが、滝のそばにあるため腐朽が酷かったため、このたび修繕し社殿をお取替し、六月十三日に祭典をおこないました。

（文 権瀬宜 馬場慶太郎）

### 徒然ばなし

#### 『何足の草鞋?!』



権瀬宜 久保田 享

私がこの山に帰ってきて早二十年が立ちました。神主として神社に奉仕し、家に帰ってはお客様をもてなし、観光協会の会議に参加し、消防団員として人命救助を行う。そんな私は「何足の草鞋」を履いているのでしょうか。それは江戸時代より栄えたこの集落が、今現在も当時の生活を色濃く残している事に理由があるのだと思います。

当時から御岳山の神職は「御師」と呼ばれ、各地に出向き配札や祈禱を行い、来山した講や参拝者を泊め、お世話するのが仕事です。（御師活動を今も継続しているのは全国でも珍しく貴重です。）そして時には林業などその時代時代に必要様々な仕事をして生活を守ってきました。当時からすでに「何足の草鞋」を履いていたのです。

山間の生活のため、すべて自分達で何とかしよう根性(?)が染みついているのでしょう。町のように警察・消防・病院・コンビニすらありませんから。私も先輩達の背中を見て育ちましたので、少なからずわかっていたのですが、本心では「なんでこんなにやる事が多いんだべー」と若い頃には随分悩んだものです。今ですすっかり諦めもつき、逆に誇りを持って仕事に向き合う日々となりました。神社の立場から、観光の立場から、自治の立場から等々、これから先百年、いや千年とこの御岳山を存続させる為の配慮を先輩達がし続けてきたように、私自身も時代に合ったやり方で続けていきます。



時には神主、時には宿の主人。消防団で救助したかと思えば、はたまた観光協会のイベント、野良仕事と早変わり。そんな「何足の草鞋」を履く山の生活を、これから私の主観全開で少しづつ、ご紹介したいと思います。（次回へつづく・・・）